

大学/大学院における プロジェクトマネジメント教育の 実態調査



PMI日本支部教育国際化委員会
公開日：2025/01/20



目次

- PM教育の実態調査について
- PM教育実態調査のポイント
- 回答いただいた大学/大学院
- 概要：大学/大学院で実施しているPM教育
- 個別：各大学/大学院で実施しているPM教育
 - ・ プロジェクトマネジメント教育の特徴（ChatGPTによる分析）
 - ・ プロジェクトマネジメント教育の内容
- 参考資料
 - ・ PM教育調査の方法と調査対象
 - ・ PM教育調査の設問
 - ・ 飯尾先生のご意見

PM教育の実態調査について

この調査は、日本の大学および大学院におけるプロジェクトマネジメント（PM）教育に関する実態調査の結果をまとめたものであり、PMI（プロジェクトマネジメント協会）日本支部の教育国際化委員会によって行われた。

1. 調査の背景と目的 :

- 日本国内の大学及び大学院におけるプロジェクトマネジメント（PM）教育の現状を把握し、その教育内容や方法について詳細な情報を収集することが目的である。

2. 調査対象 :

- 複数の大学と大学院がこの調査に回答しており、それぞれの教育プログラムの特徴や、具体的な教育内容が記載されている。

3. 調査期間 :

- 2024/10/18～2024/11/15

4. アンケート調査の設問 :

- 参考資料に記載。

PM教育実態調査のポイント

この資料は、日本の高等教育におけるPM教育の多様性と深さを示しており、学生が現代の複雑なビジネス環境で活躍できるように、広範な知識と実践的なスキルの習得に注力していることがわかる。

1. 教育プログラムの多様性：

- 各大学や大学院で提供されているPM教育は、対象学生数、単位数、学年、教育の焦点（例：実務に即したスキルの教育、理論と実践の組み合わせ）などによって異なり、PM教育のアプローチやカリキュラムには大きな差がある。これは、プログラムがそれぞれ異なる専門分野や学生のニーズに合わせてカスタマイズされていることを示していると考えられる。

2. 実務と理論の統合：

- 多くのプログラムでは、PMBOKなどの国際的な標準に基づいた教育が行われており、理論だけでなく実務に即したスキルも重視されている。これにより、学生は学んだ知識を直接職場に応用する能力を身につけることができる。

3. 技術的および組織的スキルの強調：

- 特に情報技術や工学分野でのPM教育においては、技術的スキルだけでなく、チームでの作業、リーダーシップ、コミュニケーション能力などの組織的スキルの教育も強調されている。

4. 國際的な視野の提供：

- 英語教材の使用や多言語での授業実施など、グローバルな業務環境で活動するための国際的な視野を学生に提供しているプログラムもあり、グローバル化が進む現代において、国際的なプロジェクトを管理する能力開発に適合している。

5. 学習者に適した学習プログラムの展開：

- 初年次から上級年次まで、学生の成長に応じて徐々に難易度を高めるプログラムが組まれている点も見受けられる。これにより、学生は基礎から応用まで徐々に知識とスキルを深めることができる。
- 例えば、サイバー大学では1年次から3年次にかけて段階的に学ぶカリキュラムが設計されており、情報システム開発プロジェクトの具体的なスキルを実践的に学ぶことができる。

回答いただいた大学/大学院

概要：大学全体としてのPM教育状況把握のための調査

第一工科大学 工学部 情報・AI・データサイエンス学科
山口大学大学院技術経営研究科
東京理科大学 経営学部 国際デザイン経営学科
中央大学 国際情報学部
金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科
サイバー大学、IT総合学部
愛媛大学、教育・学生支援機構
名古屋工業大学
青山学院大学国際マネジメント研究科
東京都立産業技術大学院大学 産業技術研究科
公立はこだて未来大学
川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療秘書学科・大学院医療秘書学専攻
広島修道大学

個別：個別のPM教育に関する調査

中央大学 国際情報学部
サイバー大学、IT総合学部 x 3 (個別回答)
法政大学、専門職大学院イノベーションマネジメント研究科
名古屋工業大学
公立はこだて未来大学 システム情報科学部
川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療秘書学科。大学院医療福祉マネジメント学研究科医療費秘書学専攻 x2 (集約回答)
広島修道大学、経済科学部経済情報学科 x2 (集約回答)

回答数：9件

PM教育の数：11件

回答数：13件

概要：大学/大学院で実施しているPM教育

概要：大学/大学院で実施しているPM教育(1)

大学名、学部学科/大学院研究科名	実施しているプロジェクトマネジメント教育について 大学大学名、学部学科・大学院研究科名、科目名、単位数、対象学年、対象学生数
第一工科大学 工学部 情報・AI・データサイエンス学科	第一工科大学、工学部 情報・AI・データサイエンス学科、ITマネージメント論 3年生、 100名
山口大学大学院技術経営研究科	弊研究科では、現在プロジェクトマネジメント科目はありません。
東京理科大学 経営学部 国際デザイン経営学科	1. 東京理科大学、経営学部 国際デザイン経営学科、プロジェクトマネジメント、2単位、3年4年、約40名 2. 東京理科大学、経営学部 国際デザイン経営学科、プログラミング応用、2単位、3年4年、約30名 3. 東京理科大学、学部横断型科目、イノベーション・チーム・ラボ、2単位、3年4年大学院修士、約12名
中央大学 国際情報学部	1. 中央大学、国際情報学部、プロジェクトマネジメント、3・4年生、20名
金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科	1. 金沢工業大学、全学、技術マネジメント、3年、不明 2. 金沢工業大学、環境土木工学科、プロジェクトマネジメントI、3年、不明 3. 金沢工業大学、環境土木工学科、プロジェクトマネジメントII、3年、不明
サイバー大学、IT総合学部	1. サイバー大学、IT総合学部、プロジェクトマネジメント入門、2単位、1年次、約700名 2. サイバー大学、IT総合学部、ITプロジェクトマネジメント講義、2単位、3年次、約300名 3. サイバー大学、IT総合学部、ITプロジェクトマネジメント演習、2単位、3年次、約100名
愛媛大学、教育・学生支援機構	愛媛大学、理工学研究科及び地域レジリエンス学環、プロジェクトマネジメント概論、1単位、修士1～、30名
名古屋工業大学	名古屋工業大学、社会工学科 経営システム分野、プロジェクトマネジメント、2単位、2年生、35-40名程度

概要：大学/大学院で実施しているPM教育(2)

大学名、学部学科/大学院研究科名	実施しているプロジェクトマネジメント教育について 大学大学名、学部学科・大学院研究科名、科目名、単位数、対象学年、対象学生数
青山学院大学国際マネジメント研究科	青山学院大学、国際マネジメント研究科、プロジェクトマネジメント、2単位、大学院1・2年生対象、30名
東京都立産業技術大学院大学 産業技術研究科	東京都立産業技術大学院大学 産業技術研究科、プロジェクトマネジメント特論1、全学年、100名 東京都立産業技術大学院大学 産業技術研究科、プロジェクトマネジメント特論2、全学年、100名 東京都立産業技術大学院大学 産業技術研究科、プロジェクトマネジメント特論3、全学年、100名 東京都立産業技術大学院大学 産業技術研究科、プロジェクトマネジメント特別講義、全学年、100名
公立はこだて未来大学	公立はこだて未来大学、システム情報科学部、システム情報科学実習、4単位、3年次、240名
川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療秘書学科 大学院医療秘書学専攻	1・川崎医療福祉大学、医療福祉マネジメント学部、医療秘書学科、医療組織論、2単位、3年、35名 2・川崎医療福祉大学、医療福祉マネジメント学研究科、医療秘書学専攻、段取りマネジメント特論、2単位、1年、2名
広島修道大学	1.広島修道大学、経済科学部経済情報学科、プロジェクトマネジメント論I、2単位、3-4年生、150名程度 2.広島修道大学、経済科学部経済情報学科、プロジェクトマネジメント論II、2単位、3-4年生、90名程度

個別：各大学/大学院で実施しているPM教育

各大学／大学院の授業に対する報告の順番

- プロジェクトマネジメント教育の特徴（ChatGPTによる分析）
- プロジェクトマネジメント教育の内容

ChatGPTによる分析

- プロジェクトマネジメント教育の内容のpdfファイルをアップロード。
- 下記の指示を実行。

指示

{大学} のプロジェクトマネジメント教育の特徴を箇条書きでまとめなさい。

情報

<https://syllabus.chuo-u.ac.jp/syllabus/detail/?id=12267>

{大学}:###

中央大学 国際情報学部

###

1. PMBOKの活用

- プロジェクト管理の知識体系であるPMBOKを基に、プロジェクトの各フェーズでの重要ポイントを学ぶ。

2. 多言語対応

- 講義資料は英語で作成され、日本語の教科書と併用。講義は主に日本語で行うが、一部英語も使用することで国際的な視点を養う。

3. 少人数制の授業

- 20人程度の受講者数を対象に、講義と演習を組み合わせた丁寧な教育を実施。

4. 実践的なスキルの育成

- WBS作成、スケジュール・コスト・リスク管理、品質マネジメントなど、実務で求められる具体的な手法を学び、身近なプロジェクトに応用できるスキルを育成。

5. 総合的なプロジェクト管理の理解

- ステークホルダー管理やプロジェクトのコントロール、コミュニケーションマネジメントまでを含む、幅広いプロジェクト管理領域をカバー。

6. 理論と実践のバランス

- 講義と演習を組み合わせ、プロジェクト管理の概念理解だけでなく、具体的な活用方法や実践を重視。

7. 段階的な学習設計

- 初回のイントロダクションから、最終回の総まとめまで、プロジェクト管理の基礎から応用まで体系的に学ぶカリキュラム。

これらの特徴により、中央大学のプロジェクトマネジメント教育は、実践的かつ国際的な視野を備えたプロジェクトマネジメントスキルの習得を目指しています。

個別：中央大学 国際情報学部

講義名：プロジェクトマネジメント

対象：3・4年生

受講者数：20人

授業の概要

プロジェクトとは何か、プロジェクトを成功に導くためにはどのように管理しなければならないかについて学ぶ。プロジェクト管理の知識体系であるPMBOKを参考に、それぞれのフェーズで気をつけなければならないポイントは何かなどを理解する。教科書は日本語で書かれたものを使用するが、授業内で提示する資料は英語で用意したものを使用する。講義で使用する言語は基本は日本語だが、一部、英語を使うこともある。

科目目的

プロジェクト・マネージメントの概念を理解することが本科目の目的である。プロジェクトを導くための様々な手法を理解し、一部でも活用できるようになることを目的とする。

到達目標

- 「プロジェクト」や「プロジェクトマネジメント」とは何かを理解すること
PMBOKが解説する様々な手法の概要や目的、使用方法、使用状況などについて理解すること。
- 学んだ様々な手法を身近なプロジェクトに対して活用できること。

教授法	授業を担当している教員の属性
講義 + 演習	大学教員

授業計画と内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 ソフトウェア開発プロセス
- 第3回 ステークホルダーと組織
- 第4回 PMBOK
- 第5回 スコープ・マネジメント
- 第6回 WBSとリソース・マネジメント
- 第7回 スケジュール・マネジメント
- 第8回 コスト・マネジメント
- 第9回 リスク・マネジメント
- 第10回 リソース・マネジメント
- 第11回 プロジェクトのコントロール
- 第12回 コミュニケーション・マネジメント
- 第13回 品質マネジメント
- 第14回 総まとめ：プロジェクトマネジメントについて

プロジェクトマネジメント教育の特徴 サイバー大学 IT総合学部

1. 段階的な学びの設計

- 1年次の「プロジェクトマネジメント入門」から3年次の「ITプロジェクトマネジメント講義」「ITプロジェクトマネジメント演習」へと、基礎から応用、実践へと進むカリキュラム設計。

2. 具体的な到達目標の設定

- 各科目でPDCAサイクル、WBS作成、コスト・リスク・品質マネジメントなど、プロジェクトマネジメントの基礎知識とスキルを具体的な到達目標として明示。

3. 情報システム開発に特化

- 情報システム開発のプロセスを中心に、要件定義、投資対効果算出、工数計算、システム仕様書作成など、実務に直結した内容を学ぶ。

4. ケーススタディを重視

- 「ITプロジェクトマネジメント演習」では、ケーススタディ形式で模擬プロジェクトを体験し、システム開発計画書の作成から品質検証、改善プラン作成、最終プレゼンまでを実施。

5. 実務的な学びを強調

- プロジェクト計画書や品質計画書の作成、SWOT分析、投資対効果の算出など、実務で求められるスキルを演習を通じて習得。

6. 多人数の受講者に対応

- 各科目の受講者は数百名規模で、オンライン授業を基盤としながら質の高い教育を提供。

7. 総合的なプロジェクト管理スキルの育成

- 立ち上げから運営、リスク管理、問題解決、振り返りまで、プロジェクト全体を俯瞰的に学ぶ教育設計。

8. 学年に応じた専門性の深化

- 1年次には基礎的なプロジェクト管理スキルを習得し、3年次には実務に近い演習形式で応用スキルを磨く。

これらの特徴により、サイバー大学のプロジェクトマネジメント教育は、基礎から応用、実践まで一貫した学びを提供し、実務に直結したスキル育成を目指しています。

個別：サイバー大学、IT総合学部(1)

講義名：プロジェクトマネジメント入門、2単位

対象：1年生

受講者数：約700名

教授法	授業を担当している教員の属性
講義	大学教員

科目概要

ビジネス環境の変化が加速化する現在、非常設の目的達成型組織であるプロジェクトによる活動が増加している。本科目では、プロジェクトマネジメントの入門編として、プロジェクトという活動の特徴と、それをマネジメントする際の基礎的知識を体系的に学ぶ。後半では情報システム開発プロジェクトの特徴とマネジメントの勘所について事例を使いながら解説し、初步的な情報システム開発のプロジェクト計画書の作成手順について説明できるようにする。

科目目標

【到達目標】

- ①PDCAの考え方を理解し、説明できる
- ②プロジェクト全体のサイクルを理解し、立ち上げの手順を説明できる
- ③プロジェクトの管理、計画で使用するWBSについて説明できる
- ④WBSをベースとしたシステム開発のプロジェクト計画書作成の手順を説明できる
- ⑤事例について往路、復路の分析から、クリティカルパスを判断できる
- ⑥プロジェクトにおける、コスト・品質・組織・コミュニケーション・リスク・調達の6つのマネジメントについて、説明できる

授業計画と内容

- | | |
|------|------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション |
| 第2回 | プロジェクトのライフサイクル |
| 第3回 | 管理の基本PDCA |
| 第4回 | プロジェクトの立ち上げプロセス |
| 第5回 | プロジェクトのタイムマネジメント |
| 第6回 | クリティカルパスの見つけ方と対応 |
| 第7回 | プロジェクトのコストマネジメント |
| 第8回 | プロジェクトの品質マネジメント |
| 第9回 | プロジェクトの組織マネジメント |
| 第10回 | プロジェクトのコミュニケーションマネジメント |
| 第11回 | プロジェクトのリスクマネジメント |
| 第12回 | プロジェクトの調達マネジメント |
| 第13回 | システム要求仕様書 |
| 第14回 | プロジェクト計画書の作成 |
| 第15回 | まとめ |

個別：サイバー大学、IT総合学部(2)

講義名：ITプロジェクトマネジメント講義、2単位

対象：3年生

受講者数：約400名

教授法	授業を担当している教員の属性
講義	大学教員

科目概要

本科目では、情報システム開発プロジェクトにおける計画立案から要件定義、開発に至る一連のプロセスの実務的な基礎知識を習得する。上流のビジネス課題の解決からシステム企画への流れ、開発プロジェクト中に発生する典型的な課題の対処法、さらにフロントローディングの手法など、実際の情報システム開発プロジェクトに必要な知識を理解し、マネジメントの要諦を述べられるようにする。

科目目標

履修目標

- ①企業における情報システムの役割を説明できる
- ②システムを導入するための計画、開発、運用、保守において検討する事項を説明できる
- ③ソフトウェア開発工程で求められる要件定義、見積もり、計画書の立案における手順を説明できる
- ④開発プロジェクト中に発生する問題に対する解決方法を検討できる
- ⑤プロジェクトの問題を認識し、立て直すマネジメント手法の要点を説明できる

授業計画と内容

- | | |
|------|----------------|
| 第1回 | オリエンテーション |
| 第2回 | 企業と情報システム |
| 第3回 | 情報システムの計画 |
| 第4回 | 投資対効果予測 |
| 第5回 | システムの運営と保守 |
| 第6回 | 要件定義 |
| 第7回 | システム開発規模の見積り |
| 第8回 | 開発計画書の立案 |
| 第9回 | 全体運営で発生する問題 |
| 第10回 | 上流工程で発生する問題 |
| 第11回 | 下流工程で発生する問題 |
| 第12回 | 7 3型開発 |
| 第13回 | プロジェクトの立て直し |
| 第14回 | 課題管理とプロジェクトの現場 |
| 第15回 | まとめ |

個別：サイバー大学、IT総合学部(3)

講義名：ITプロジェクトマネジメント演習、2単位

対象：3年生

受講者数：約100名

教授法	授業を担当している教員の属性
演習	大学教員

科目概要

情報システム開発のプロジェクトをケーススタディ形式で模擬体験する。与えられたケースの中から1つを選択し、課題の抽出、システムソリューションの提案、投資対効果の算出、工数計算、WBS作成などを行いシステム開発プロジェクト計画書を完成させる。仮想のシステムを一つシステム企画書に基づいて実際に作成し、評価にもとづいて改善計画を練る。システム開発プロジェクトの上流工程から下流工程までを一貫して体験することによって、実務的なシステム開発プロジェクト計画書が作成できるようとする。

科目目標

プロジェクトマネージャーとして演習を通して以下の基礎知識を実践の中で身につけることができる。

【到達目標】

- ①プロジェクトの把握
- ②プロジェクトの組み立て
- ③プロジェクト推進（実行）
- ④プロジェクト改修
- ⑤プロジェクト説明

授業計画と内容

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 SWOTによる現状分析
- 第3回 システム仕様書の作成
- 第4回 システム構築環境の選択
- 第5回 投資対効果の算出
- 第6回 WBSの作成
- 第7回 ソリューションの実現
- 第8回 品質計画書作成
- 第9回 システム構築①
- 第10回 システム構築②
- 第11回 品質検証とテスト
- 第12回 投資対効果の検証
- 第13回 改善プラン作成
- 第14回 最終プレゼン準備
- 第15回 プロジェクトの振り返り

法政大学、専門職大学院イノベーションマネジメント研究科

1. 実務直結の学び

- プロジェクトマネジメントの理論だけでなく、実際の業務に活用可能なスキルを重点的に教育。

2. 少人数での丁寧な指導

- 修士課程の学生を対象とし、受講者数は20～30名程度の少人数制で行われる。

3. 多様なマネジメントスキルの習得

- スコープマネジメント、リスク管理、チームマネジメント、スケジュール管理、モニタリング＆コントロールなど、多岐にわたるスキルを網羅。

4. チーム演習による実践力の向上

- 演習を通じて課題解決能力を養い、プロジェクト管理のスキルを実務に活かせるようトレーニング。

5. ステークホルダーマネジメントの重視

- ステークホルダーの要求分析や対応方法について、理論と演習を通じて学習。

6. 実務事例を活用した教育

- 実際のプロジェクト事例を取り上げ、理論と実践を結びつける内容で学びを深める。

7. 社会人講師との連携

- 社会人講師が加わり、業界での経験に基づいた具体的なアドバイスを提供。

8. 具体的なプロジェクトの設計と実践

- プロジェクトの設計からモニタリング、最終的なまとめまで、全過程を体験するカリキュラムを構築。

これらの特徴から、法政大学のプログラムは、理論と実務をバランスよく学び、実践力を高めることを目的として設計されています。

個別：法政大学、専門職大学院イノベーションマネジメント研究科

講義名：プロジェクトデザインマネジメント、8単位
対象：修士1, 2年生
受講者数：20~30名

【授業の概要と目的（何を学ぶか） / Outline and objectives】

プロジェクトとは、特定の使命を受けて、特定期間に、資源、状況など特定の制約条件の下で達成を目指す、将来に向けた価値創造事業である。プロジェクトの特徴は、①目的を達成する活動である、②特定された始まりと終了の時点がある、③使用できる資源の制約がある、④ある特定の成果を出すあるいは特定の問題や課題を解決するので何を達成するのか明確であり成否がはっきりわかる。プロジェクトマネジメントは、プロジェクトを成功に導くために、事業主体や他のステークホルダーの要求事項や期待を充足する、またはそれ以上の成果を上げるために、最適な知識、技術、ツールそして技法を適用することである。本授業は、座学でプロジェクトマネジメントに関する知識、スキルを理解し、チーム演習を通じて、プロジェクトマネジメントの適用を体得する。

【到達目標 / Goal】

- ①知識・思考：プロジェクトマネジメントに関する基礎的な考え方や知識、求められるスキルを理解できる。
- ②技能・表現：具体的に課題を通じてプロジェクトマネジメントの知識やスキルを自業務にテラリングできる。
- ③意欲・関心・態度等：チーム演習を通じて、プロジェクトマネジメントに関心を持ち、自己のプロジェクトに活用することができる。

教授法	授業を担当している教員の属性
講義 + 演習	大学教員 + 社会人講師

授業計画と内容

- 第01回 はじめに、プロジェクトとは
- 第02回 プロジェクト、プロジェクトマネジメントに関するチーム演習
- 第03回 ステークホルダーの要求分析とスコープマネジメント
- 第04回 ステークホルダーの要求とスコープマネジメント演習
- 第05回 チーム・マネジメント
- 第06回 リスクと変更管理
- 第07回 ステークホルダー・マネジメント
- 第08回 スコープ & スケジュールマネジメント
- 第09回 スコープ & スケジュールマネジメント
- 第10回 モニタリング & コントロール
- 第11回 プロジェクトマネジメントの実務事例
- 第12回 プロジェクトマネジメントの実務事例
- 第13回 その他のマネジメント
- 第14回 前回のまとめ

1. 対象は2年生

- 受講者は2年生を対象としており、基礎的なプロジェクトマネジメントスキルを習得する段階にフォーカス。

2. 少人数制

- 受講者数は35～40名程度で、きめ細やかな指導が可能な環境。

3. 講義と演習の組み合わせ

- 理論を学ぶ講義と実践的なワークを通じて、プロジェクトマネジメントスキルを具体的に習得。

4. 広範な経営資源の管理をカバー

- 「人・モノ・金・情報・時間・知的財産」といった経営資源の管理方法を学ぶ。

5. チームメンバーとしての役割を重視

- プロジェクトにおいてチームメンバーとして適切に振る舞える能力を養成。

6. 実務的な管理プロセスの習得

- プロジェクト計画、進捗管理、スケジューリング、コスト管理、変更管理、リスク管理、コミュニケーション管理など、実務的なプロセスを網羅。

7. システム思考の導入

- プロジェクトマネジメントの中でシステム思考や組織論を取り入れることで、プロジェクトの全体像を理解。

8. ケーススタディによる実践

- 授業の最後にケーススタディと成果発表を実施し、実践的な学びを通じて理解を深める。

これらの特徴により、名古屋工業大学のプロジェクトマネジメント教育は、理論と実践をバランスよく組み合わせ、基礎的なスキルから実務で活用できる応用力を育成することを目指しています。

個別：名古屋工業大学

講義名：プロジェクトマネジメント、2単位
対象：2年生
受講者数：35~40名

教授法	授業を担当している教員の属性
講義 + 演習	大学教員

授業の目的・達成目標

【授業の目的】

プロジェクトとして遂行する上で重要な経営資源「人・モノ・金・情報・時間・知的財産」の管理方法に関して概説し、講義とワークを通して具体的に習得することを目的とする。

【達成目標】

- ①対象をプロジェクトとして捉えることが出来る。
- ②プロジェクトにおいて、チームメンバーとして振る舞える。
- ③管理プロセスに従い、PM手法を選択し適用できる

授業計画

- ・ガイダンス
- ・イントロダクション
- ・プロジェクトマネジメントの歴史
- ・プロジェクトマネジメント、システム思考、組織
- ・プロジェクト計画と進捗管理
- ・要求、作業、成果物
- ・プロジェクトスケジューリングと進捗管理
- ・コスト管理
- ・変更管理
- ・リスク管理
- ・コミュニケーション管理
- ・ケーススタディ & 成果発表

1. プロジェクトベースの学習（PBL）

- 講義形式ではなく、プロジェクトを中心とした学習形態で、実践を重視。

2. 全員参加型の実習

- 対象は3年生全員（約240名）で、プロジェクトを通じた実践的なスキルの習得を目指す。

3. 問題解決能力の育成

- 問題発見、解決のための専門知識の習得、システムや作品の制作を通じた問題解決力を養成。

4. チームワーク重視

- 複数のメンバーで協働し、プロジェクトを遂行する能力を身につける。

5. 報告・発表スキルの向上

- 成果物を報告書やプレゼンテーションを通じて第三者に伝えるスキルを習得。

6. 成果の社会還元

- プロジェクトの成果を地域社会や大学内外に公表し、社会貢献を重視。

7. スケジュール管理と自主性

- 4月にプロジェクトを開始し、7月の中間発表、12月の成果発表、1月の最終報告書提出までを学生が主体的に管理。

8. 多様な教育機会の提供

- 通常の講義とは異なる形で、プロジェクトを通じた幅広い学習機会を提供。

これらの特徴から、公立はこだて未来大学のプログラムは、実践的な学びを中心に据え、地域社会との連携やプロジェクト遂行能力の育成に重点を置いています。

個別：公立はこだて未来大学 システム情報科学部

講義名：システム情報科学実習、4 単位

対象：3年生

受講者数：240名（3年生全員）

教授法	授業を担当している教員の属性
Project Based Learning	大学教員

授業の概要

履修者は、プロジェクト遂行のために必要な以下の技術を学習する。

(1) 問題発見

・解決すべき問題を発見する。

(2) 共同作業

・複数のメンバーで1つの問題を解決する。

(3) 問題解決

・問題解決に必要となる専門知識を身に付ける。

・実践として新たな理論、システム、作品などを制作する。

(4) 報告（発表、文書）

・第三者に伝えるために、報告書を作成し、発表を行う。

授業の到達目標

・プロジェクト遂行に必要となるルールを学習する。

・プロジェクト遂行に必要となる技術を学習する。

・プロジェクトを自主的に管理・運営する方法を学習する。

・通常の講義とは異なる多様な教育機会を、履修者に提供する。

・成果を内外に公表し、大学および地域社会に貢献する。

授業内容とスケジュール

4月：プロジェクトの説明会

希望調査

プロジェクトへの配属

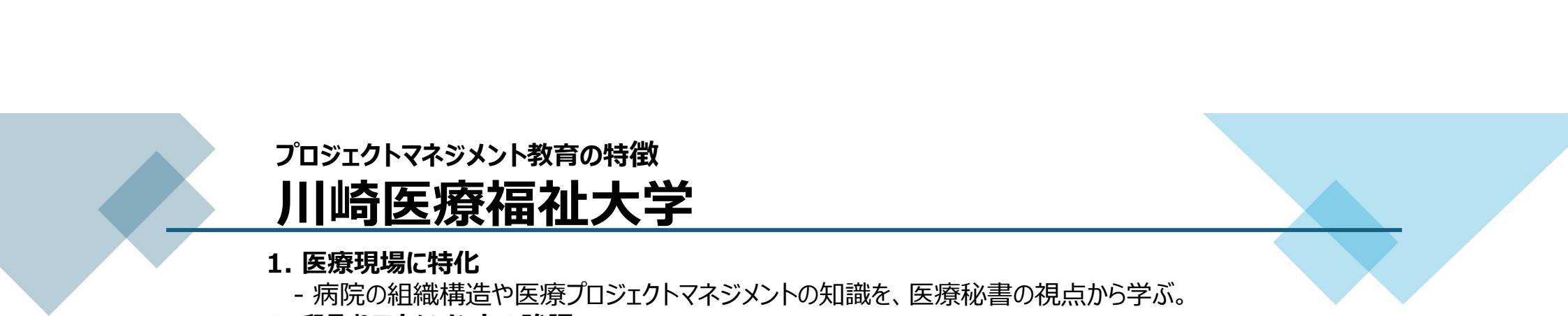
プロジェクト学習開始

7月：中間発表会

中間報告書提出

12月：成果発表会

1月：最終報告書提出



プロジェクトマネジメント教育の特徴

川崎医療福祉大学

1. 医療現場に特化

- 病院の組織構造や医療プロジェクトマネジメントの知識を、医療秘書の視点から学ぶ。

2. 段取りマネジメントの強調

- 作業分解（WBS）、RACIチャート作成、リスク特定など、段取りに必要な手法を具体的に学ぶ。

3. 国際的なプロジェクトマネジメント標準の活用

- PMBOKから医療現場に適した知識を抽出し、ステークホルダーやコミュニケーションマネジメント計画を学ぶ。

4. 多様な授業形式

- グループワーク、課題解決型学習、ディスカッション、双方向授業を通じて、実践的なスキルを養成。

5. 実務経験を活かした教育

- 教員の病院勤務経験を活かし、現場でのチーム医療マネジメントの事例を学べる。

6. ステークホルダーマネジメントの実践

- ステークホルダー登録簿の作成や分類を通じて、関係者の管理スキルを養成。

7. コミュニケーション計画と実践

- コミュニケーションマネジメント計画書の作成やその実践方法を具体的に学ぶ。

8. 多様な段取りのシナリオ

- 入院、手術、退院、遠隔診療などのシナリオを通じて、医療現場の具体的な段取りを体験的に学ぶ。

9. 上級秘書業務に対応

- 修士課程では、理事長や院長の医療秘書としての業務を想定した段取りの知識とスキルを習得。

10. リスクと教訓の管理

- リスク対応や遅延修正方法、業務の教訓の記録・保存方法を学び、持続的な改善を目指す。

これらの特徴を通じて、川崎医療福祉大学は、医療秘書や医療マネジメントに特化した実践的なプロジェクト管理能力を育成する教育を提供しています。



個別：川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部医療秘書学科

講義名：医療組織論、2単位

対象：3年生

受講者数：35名

教授法	授業を担当している教員の属性
講義 + 演習	大学教員

実務経験を通じた実践的教育内容	大学病院にて事務職員として勤務した経験があります。実際の医療現場でのチーム医療の体験を提示し、チーム医療のマネジメントの考察に活かしていただきます。
授業のねらい	臨床現場でクリニカルセクレタリーの業務を実践するために、段取り領域の技能を修得する。
到達目標	<ul style="list-style-type: none">・病院の組織構造の特徴が説明できる・プロジェクトの定義とフェーズが説明できる・段取りマネジメントで必要な作業分解ができる、ガントチャートが作成できる・ステークホルダー登録簿、コミュニケーションマネジメント計画書が作成できる

授業内容	
病院の組織構造を学んだあとに、チーム医療の段取りマネジメントで、国際的プロジェクトマネジメント標準（PMBOK）から抽出して医療用にしたものから、段取り（目的、方針、範囲の定義・作業分解・WBSの作成・マネジメント計画・リスク分解）、ステークホルダーマネジメントおよびコミュニケーションマネジメント（定義・計画の策定・技法・情報マネジメントシステム・会議マネジメント技法）について学ぶ。	
授業の特色	
グループワーク、プレゼンテーション、課題解決型学習、双方向授業	
授業計画	
[1]	病院の組織構造（組織の形態と組織構造）
[2]	臨床現場の組織行動論
[3]	医療プロジェクトマネジメント
[4]	ステークホルダー特定・登録簿作成
[5]	コミュニケーション・マネジメント計画書作成
[6]	段取り(1)(DMMを利用したWBS)
[7]	段取り(2) (WBSの作成)
[8]	段取り(3) (WBSの検討)
[9]	段取り(4) (RACIチャートの作成)
[10]	段取り(5) (リスクの特定)
[11]	入院時の段取り
[12]	手術・検査説明時の段取り
[13]	退院時の段取り
[14]	遠隔診療の段取り
[15]	臨床指標(定義と種類)

個別：川崎医療福祉大学 大学院医療福祉マネジメント学研究科医療費秘書学専攻

講義名：段取りマネジメント特論特論
 対象：修士1年生
 受講者数：2名

教授法	授業を担当している教員の属性
講義 + 演習	大学教員

授業のねらい	上級医療秘書（理事長や院長の医療秘書）として確実に段取りを行うために、国際標準の知識と手法を修得する。
到達目標	理事長、院長の業務の段取りができる。

授業内容	
上級医療秘書に必要な具体的な業務を想定しながら、国際的標準のプロジェクトマネジメントの知識と技術を解説します。	
授業の特色	
ディスカッション・ディベート、双方向授業	
授業計画	
【1】	段取りマネジメントとは
【2】	段取りの目的と範囲
【3】	段取りの計画の立て方の概要
【4】	Diamond Mandala Matrixを使用した、段取りの作業項目の分解
【5】	段取りの作業項目の前後関係とWBS（Work Breakdown Structure）の作成
【6】	ステークホルダーの抽出と分類、ステークホルダー登録簿の作成
【7】	コミュニケーションの範囲とその方法、コミュニケーション計画の作成
【8】	コミュニケーションマネジメントの実践方法
【9】	ステークホルダーマネジメントの実践方法
【10】	クリティカルパスとPERT（Program Evaluation and Review Technique）図
【11】	段取りの作業項目の実行
【12】	段取りの作業の進捗確認とチェックリストとしてのWBS
【13】	イベント型のプロジェクト実行の実際
【14】	リスクへの対応と業務遅延の修正方法
【15】	教訓の記録と保存

プロジェクトマネジメント教育の特徴

広島修道大学

1. 学部生対象の講義

- 「プロジェクトマネジメント論I」と「プロジェクトマネジメント論II」が3年生から4年生を対象に開講され、実務経験豊富な非常勤講師による授業が含まれる。

2. 基礎知識と事例学習の組み合わせ

- プロジェクトマネジメントの基礎知識（スコープ、スケジュール、コスト、品質、リスク管理など）と、実際のプロジェクト事例を交えた学習。

3. 実務家講師による指導

- 非常勤講師としてIT企業や地域イベントでの経験を持つ専門家が招かれ、実践的な視点を提供。

4. キャリア形成への配慮

- 学生の就職活動やビジネスシーンを意識し、プロジェクトを企画・計画・実行・評価する能力を養成。

5. アジャイル手法の学習

- アジャイル開発手法を取り上げ、反復・漸進的なプロジェクト進行方法を学ぶ。

6. 地域・グローバル視点の事例研究

- 広島地域イベントやグローバルプロジェクトの事例を取り上げ、多様なプロジェクトの特性を学習。

7. プログラムマネジメントへの応用

- 「プロジェクトマネジメント論II」では、価値創造型のプログラムマネジメントを学び、ミッションプロファイリングや意思決定戦略の体系化に焦点を当てる。

8. 歴史的背景と未来志向の学び

- 近代マネジメントの歴史的背景から未来志向のトレンドまでを幅広くカバー。

9. 大人数への対応

- 「プロジェクトマネジメント論I」の受講者は約150名と大規模だが、双方向性を重視した講義が実施されている。

これらの特徴により、広島修道大学のプログラムは、理論と実践を融合し、学生がプロジェクトマネジメントを多角的に理解し、実務に適用できるスキルを育成する教育設計を実現しています。

個別：広島修道大学、経済科学部経済情報学科(1)

講義名：プロジェクトマネジメント論I、2単位

対象：3-4年生

受講者数：150名程度

教授法	授業を担当している教員の属性
講義	大学教員

学修の概要	現代社会および企業活動において主流となるプロジェクトをマネジメントに必要な知識と事例を学ぶ。 3年生以上のキャリア形成を視野に入れ、プロジェクトの企画・計画・実行・評価のプロセスを理解することによって、就職などによってこれから直面するであろうビジネスにおける本質的な問題と解決方法について、知識と事例の両面から学習し、自ら考える能力を養成することを目的とする。 基礎知識は主に代表教員が授業を担当し、事例は実際に産業界でプロジェクトビジネスを実践している実務家を非常勤講師として招き、経験的な知見を解説する。 代表教員：佐藤達男（全15回） 非常勤講師：斎藤学（PMI日本）ほか（非常勤講師は、都合により変更される場合がある） 【実務経験内容】民間のIT企業で約20年にわたってプロジェクトマネジメントに携わってきた実務経験を踏まえて、知識と経験の両面から授業を進めていく。
学修の到達目標	プロジェクトマネジメントに必要な基礎知識を理解し、その内容を説明することができるようになる。

第1回	基礎知識) プロジェクトマネジメントの概要 プロジェクトおよびプロジェクトマネジメントを概観・学修する。
第2回	基礎知識) プロジェクトの企画・計画 プロジェクトスコープマネジメントを中心に企画・計画を学修する。
第3回	基礎知識) スケジュール・コストマネジメント スケジューリングとコストマネジメントを学修する。
第4回	基礎知識) 進捗マネジメント タイムマネジメントを学修する。
第5回	基礎知識) 品質マネジメント プロジェクトの品質について学修する。
第6回	基礎知識) コミュニケーションマネジメント プロジェクトチームのコミュニケーションについて学修する。
第7回	基礎知識) 組織マネジメント プロジェクトチームの組織について学修する。
第8回	基礎知識) リスクマネジメント プロジェクトのリスクとクライスマネジメントについて学修する。
第9回	基礎知識) アジャイルプロジェクトマネジメント アジャイル開発を中心に反復・漸進型の手法とマネジメントを学修する
第10回	事例) システム開発プロジェクトのトラブル事例 これまで学習した知識を元にシステム開発のトラブル事例を学修する。
第11回	事例) ITシステム開発プロジェクトマネジメント ゲスト講師によるITシステム開発の講義による学修
第12回	事例) 地域イベントの企画・計画・実施のプロジェクトマネジメント ゲスト講師による広島の地域イベントに関するマネジメント事例の講義による学修
第13回	事例) グローバルプロジェクトマネジメント ゲスト講師によるグローバル視点のプロジェクトマネジメント事例による学修
第14回	事例) プロジェクトマネジャーに求められる資質 ゲスト講師によるプロジェクトマネジメントコンピテンシーに関する講義による学修
第15回	まとめ) これからのプロジェクトマネジメント 本授業全体を通した総括による学修

個別：広島修道大学、経済科学部経済情報学科(2)

講義名：プロジェクトマネジメント論II、2単位

対象：3-4年生

受講者数：90名程度

教授法	授業を担当している教員の属性
講義	大学教員

学修の概要	現代社会は市場や顧客ニーズの変化が激しく柔軟でかつ迅速な対応が不可欠となっている。また社会システムは全体的に高度化・多様化・複雑化し、単一のプロジェクトでは課題を解決することが難しくなってきている。このような時代背景によって、近年の社会および企業活動は変化に対応するスピードと組織や業種などの壁を越えて異なる分野・組織が連携する必要性が強調されている。 本授業では、これから時代の要求に応えて新たな価値を創造するためのマネジメントの手法として、主にプログラムマネジメントを取り上げる。近代マネジメントの歴史的背景から始めて、今日的なトレンドに対応したマネジメント事例までをカバーすることで、価値創造型のマネジメントに対する理解を深める。 【実務経験内容】民間のIT企業で約20年にわたってプロジェクトマネジメントに携わってきた実務経験を活かしていく。
	現代の社会システムおよび企業活動における価値創造型のマネジメントの重要性を理解し、説明することができる。 これからの時代を視野に入れたマネジメントのあり方について、自分の考えを示すことができる。

第1回	イントロダクション 「マネジメントとは何か？」というテーマで授業全体を概観・学修する。
第2回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（1） 近代マネジメントの源流について学修する（前半）
第3回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（2） 近代マネジメントの源流について学修する（後半）
第4回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（3） 近代マネジメントの体系化について学修する（前半）
第5回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（4） 近代マネジメントの体系化について学修する（後半）
第6回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（5） 近代マネジメントの進化について学修する（前半）
第7回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（6） 近代マネジメントの進化について学修する（後半）
第8回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（7） マネジメントの未来について学修する（前半）
第9回	近代マネジメントにおける歴史的背景とトレンド（8） マネジメントの未来について学修する（後半）
第10回	プログラムマネジメント（1） 価値創造のマネジメント＝プログラムマネジメントの全体について概観・学修する。
第11回	プログラムマネジメント（2） 「ミッションプロファイリング」を中心に学修する
第12回	プログラムマネジメント（3） プログラムデザインから構想計画の策定について学修する
第13回	プログラムマネジメント（4） プログラム戦略における意思決定の仕組みについて学修する
第14回	プログラムマネジメント（5） プログラム価値の体系化について学修する
第15回	授業全体のまとめ 全体を通じて総括・学修を深める。

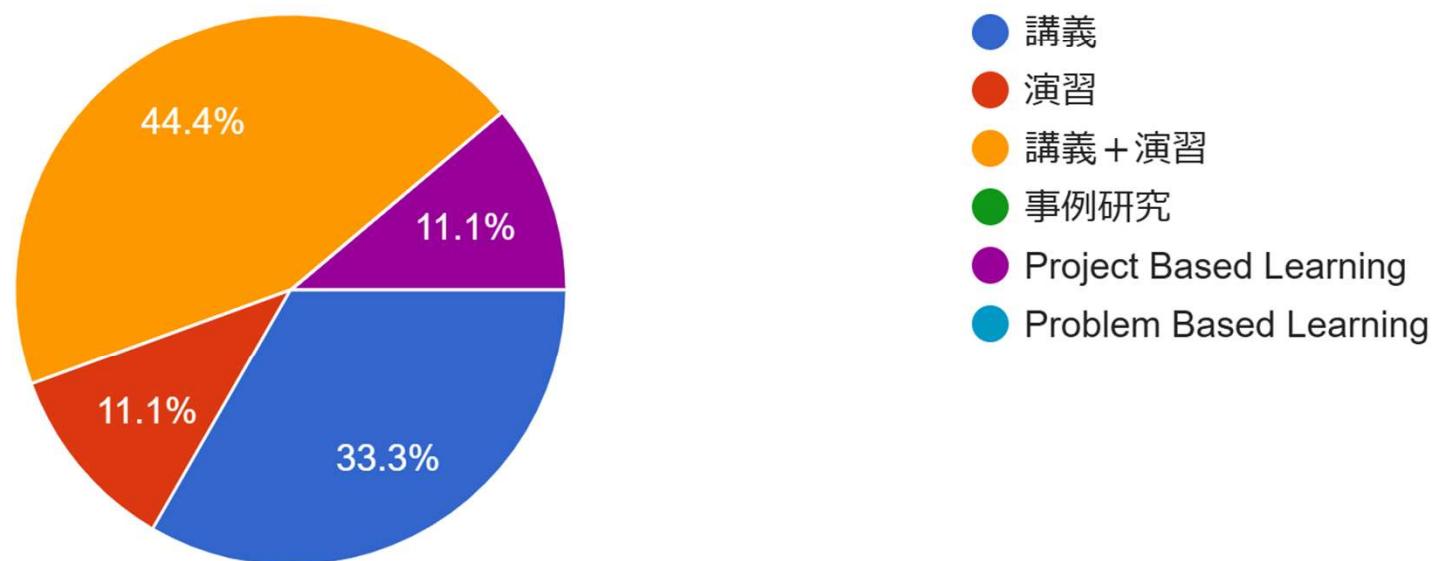
アンケート記述内容のまとめ

プロジェクトマネジメント授業の教授法

講義 + 演習が多く、次に講義が多い。

1. 5 教授法

9 件の回答

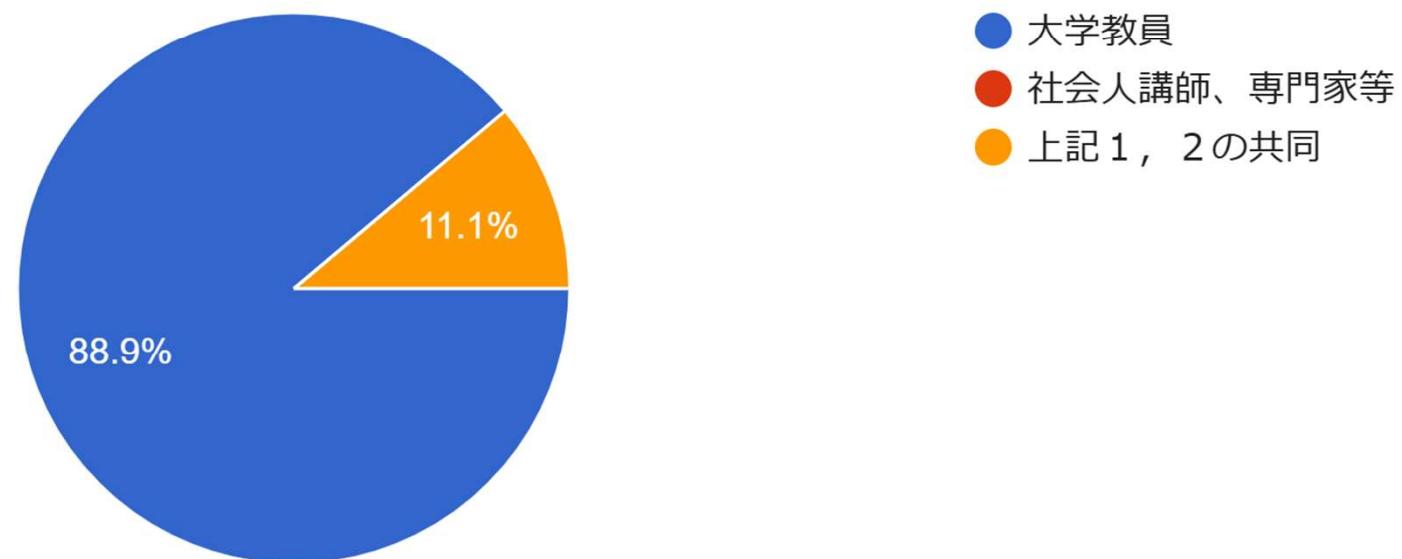


授業を担当している教員の属性

大学教員が担当している場合が多い。

1. 6 授業を担当している教員の属性

9件の回答



2. 1 授業実施のリフレクション／教訓：上手くいったこと

- ・ 飯尾淳 (2024) プロジェクトマネジメント科目における教育の効率化, プロジェクトマネジメント研究報告, Vol. 4, No. 1, pp. 36-39. および, 飯尾淳 (2022) 大学における国際化を意識したプロジェクトマネジメント教育, プロジェクトマネジメント研究報告2022, Vol. 2, No. 1, pp. 12-15. をご参照ください (以下2.2~2.4まで同じ)
⇒ 後にまとめた。
- ・ 実プロジェクト（修士研究プロジェクト）に役だったとの声が多かった
- ・ 学生に、プロジェクトマネジメントがどのような実践や学問分野から、マネジメントに必要な発想を取り入れているかを知らせること。
- ・ 解のない問題に対する課題解決能力の育成、チームマネージメント力の育成、プレゼン能力の育成、自発的技術習得力の育成
- ・ 修得したプロジェクトマネジメントの手法を、学生自身が普段の生活に活用している
- ・ インタラクティブな授業によってプロジェクトマネジメントに興味を持つてもらえたこと

2. 2 授業実施のリフレクション／教訓：難しかったこと／困ったこと

- ・ 入学までにプロジェクト経験がある学生と無い学生では理解や気づきの差がある。
- ・ システム構築の経験者に振り返りの良い機会になっている。（本学は社会人学生も多いため）
- ・ オンデマンド・スタイルで、受講時間がまちまちなのでチームでのプロジェクト運営が難しかった
- ・ MBAでは実務的にプロジェクトマネジメントに詳しい学生が多くはない
- ・ 頻繁に変わるPMBOKの存在をいかに除去するか
- ・ PBL全体の管理コストに関わる教員への負荷が高い
- ・ プロジェクトマネジメント体系の概要と重点的に教える内容との関連を理解させることが難しい
- ・ 学部生は社会人経験がない前提で話をする必要があること。

2. 3 授業実施のリフレクション／ 教訓：改善したいこと／新たにチャレンジしたいこと

- 集中講義を行ってみる予定
- JIS化されている内容をベースに構成しなおすこと。
- 現状特になし
- プロジェクトマネジメント体系の概要を、もう少し詳しく教えたい
- アジャイルなどの新たな形態について時間を割いて説明したいと思っている。

2. 4 授業実施のリフレクション／教訓：工夫していること

- ・ 反転学習でビデオ学習を取り入れ、忙しい社会人でもフレキシブルに学習できるようにしている
- ・ 規格類の暗記ではなく、実践できる能力の必要性を実感させること。
- ・ 前期終わりの中間発表および12月の最終発表で、全教員、3年履修生全員による相互評価によるフィードバックを取り入れていること
- ・ 様々な事象を、プロジェクトマネジメントの視点から分析して改善へつなぐ力を養うように仕向けている
- ・ なるべく身近な事例をもとにして、理解を促すよう工夫している

PMI日本支部への要望

- ・ プロジェクトマネジメントにおけるAIアシスタントの活用について、実情が知りたい。
- ・ 他の大学で実施しているプロジェクトマネジメント科目の情報を共有して欲しいと思います。
- ・ 大問にもとづく理解とアーンドバリュー等の計算問題を組み合わせて、1つの問題に対して、複数の問い合わせをするような例題を提供してもらえるとありがたい。
- ・ アカデミックスポンサー校が増えて、意見交換などの交流が盛んになるとよいと思います。
- ・ 他大学の先生方とシラバスについて情報交換をしてみたいと思います。

參考資料

PM教育調査の方法と調査対象

PM教育調査の方法

1. PMI日本支部に登録しているアカデミックスポンサー校の代表者にアンケートを送付。

2段階のアンケートを実施

2. アカデミックスポンサー校の代表者向けアンケート（概要調査）

アカデミックスポンサー校の代表者が属している教育機関全体のPM教育の概況を回答してもらった。ただし、アカデミックスポンサー校の代表者がPM教育に関りがない場合、アンケートを回収できない場合があった。

3. PM教育を実際に行っている授業担当者向けアンケート（個別調査）

アカデミックスポンサー校の代表者の方と異なる教員がプロジェクトマネジメント授業を担当している場合がある。このため、アカデミックスポンサー校の代表者から実際にPM教育を実施している担当者に、担当するPM教育についてのアンケートを転送してもらい、PM教育担当者にアンケートに記入してもらった。

調査対象

PMI日本支部に登録しているアカデミックスポンサー校の代表者、55人にアンケートを送付した。
回収状況は、報告に記載。

https://www.pmi-japan.org/corporate_sponsor/academic-sponsors-list/

PM教育調査の設問(1)

アカデミックスポンサー校の代表者向けアンケート

1. 1 このアンケートを受け取った受領者のお名前
1. 2 このアンケートを受け取った受領者の 大学（会社）名、学部学科(and/or)大学院研究科名等
1. 3 貴方または貴大学で実施しているプロジェクトマネジメント教育について以下のフォーマットで記入ください。なお、対象学生数がわからない場合、概数を書くか、不明としてください。
 1. 大学大学名、学部学科・大学院研究科名、科目名、単位数、対象学年、対象学生数
 2. 大学大学名、学部学科・大学院研究科名、科目名、単位数、対象学年、対象学生数
 - ...
2. PMI日本支部への要望があればお書きください。

PM教育調査の設問(2)

授業担当者向けアンケート

本調査票に記入を依頼した教員名大学名：教員名
(一つ目の調査票と同一の方の場合も記入をお願いいたします)

1. 1 科目を担当している教員名
1. 2 担当している科目名、単位数、対象学年、対象学生数
1. 3 教員の大学（会社）名、学部学科(and/or)大学院研究科名等
1. 4 科目のシラバスへのURL
1. 5 教授法（単一選択）
1. 講義、2. 演習、3. 講義+演習、4. Problem Based Learning, 5. Project Based Learning
1. 6 授業を担当している教員の属性（単一選択）
1. 大学教員、2. 社会人講師・専門家等、1, 2の共同
2. 1 授業実施のリフレクション／教訓：上手くいったこと
2. 2 授業実施のリフレクション／教訓：難しかったこと／困ったこと
2. 3 授業実施のリフレクション／教訓：改善したいこと／新たにチャレンジしたいこと
2. 4 授業実施のリフレクション／教訓：工夫していること
3. PMI日本支部への要望があればお書きください。

飯尾先生のご意見(1)

- ・ 飯尾淳 (2024) プロジェクトマネジメント科目における教育の効率化, プロジェクトマネジメント研究報告, Vol. 4, No. 1, pp. 36-39.
- ・ 飯尾淳 (2022) 大学における国際化を意識したプロジェクトマネジメント教育, プロジェクトマネジメント研究報告2022, Vol. 2, No. 1, pp. 12-15.

授業実施のリフレクション／教訓：上手くいったこと

1. 国際性を意識した教材設計

- 講義資料や演習用ワークシートを英語で準備し、日本語版も併用することで、国際的な視点を持つ学生の育成に成功した。

2. 反転授業の効果的な導入

- 予習用動画を提供し、授業内では実践的な作業やグループワークに集中する形式を採用。これにより、知識の定着を深める効果が得られた。

3. 少人数教育での丁寧な指導

- 初期段階で少人数の学生に対し、きめ細かい演習のフィードバックを行い、理解を深める丁寧な教育を実現。

4. 講義内容の実践的なアプローチ

- PMBOK®ガイド第6版に基づき、具体的なプロジェクトマネジメント手法（WBS作成、スケジュール作成など）を取り入れ、実務に即した知識を提供。

5. 授業内のインタラクティブ性の向上

- 学生の提出物を匿名化して共有し、クラス全体でのディスカッションやフィードバックを通じて、多様な視点の学びを促進。

6. 予習と欠席補完の仕組み

- オンデマンド動画を事前に提供し、欠席時にも学びを継続できる仕組みを整備。

飯尾先生のご意見(2)

授業実施のリフレクション／教訓：難しかったこと／困ったこと

1. オンライン講義の限界

- 学生が講義動画のみで課題を理解するのが難しく、指示の誤解が目立つケースがあった。また、オンライン自学自習形式では、実践的な手法（WBS作成やスケジュール作成など）に適した学びが難しいという限界があった。

2. 反転授業への移行時の課題

- 対面型の反転授業への参加率が低下傾向にあり、学生を教室に引きつける仕掛けが必要とされた。また、オンライン参加者を完全に排除できず、オンライン・対面の併用が必須となり、講義形式の調整が複雑化した。

3. 多人数化への対応

- 受講者が急増（例年10数名→50名近く）した際、少人数教育の質を維持しつつ効率化を図る必要があり、従来の方法をそのまま適用するのが困難だった。

4. フィードバックの負担増

- 学生の課題へのフィードバックを従来のように丁寧に行うことが難しくなり、提出物の匿名化や順不同化を自動化する必要に迫られた。

5. 国際性の意識と学生対応

- 講義資料を英語で用意しながらも、英語で課題を提出する学生がほとんどいなかったため、国際性の取り組みと実際の学習環境とのギャップが見られた。

6. ハイブリッド講義の課題

- 対面とオンラインのハイフレックス型授業の実施は、双方の学生に均等な教育効果を提供するのが難しく、運営の煩雑さが課題となった。

飯尾先生のご意見(3)

改善したいこと／新たにチャレンジしたいこと

1. 学生の対面授業参加を促進する仕掛けの工夫

- 対面授業への参加率を向上させるために、魅力的な授業内容やインセンティブの設計が必要とされている。

2. オンラインと対面のハイブリッド形式の最適化

- ハイフレックス型授業の運営に伴う複雑さを軽減し、オンラインと対面の双方に均等な教育効果を提供する方法の模索。

3. 国際性のさらなる強化

- 英語による課題提出や国際的な学びの機会を増やすことで、学生が国際性をより実感できる学習環境を整備。

4. 増加した受講者への効率的な対応

- 大人数化に対応するため、課題評価やフィードバックのさらなる自動化や効率化を進める必要がある。

5. 授業内容の継続的な改善

- 学生からのフィードバックを基に、演習や講義内容の魅力度を向上させることが挙げられる。また、授業後のアンケートの活用を強化。

6. 予習教材の活用促進

- 予習用動画や資料をより積極的に活用してもらえるよう、学生の学習習慣に合わせた工夫を導入。

7. 学生同士の協働学習の強化

- グループワークやディスカッション形式の授業を充実させ、学生同士が互いに学び合える環境の構築。

飯尾先生のご意見(4) 授業実施のリフレクション／教訓：工夫していること

1. 反転授業の導入

- 講義動画を事前に提供し、授業内ではグループワークや演習を中心にしてすることで、実践的な学びを促進。

2. 予習教材の提供

- 講義内容に関連する動画や資料を事前に公開し、学生が授業前に学習できる仕組みを整備。

3. 講義資料の国際化

- 授業内で使用する資料を英語で作成し、日本語版も併用することで、学生の国際的な視野を広げる工夫。

4. 課題提出システムの自動化

- 学生が提出した課題を匿名化し、提出順をランダム化するスクリプトを使用して効率化を図る。

5. インタラクティブな演習の実施

- 簡単な課題から深い考察が必要な課題まで、多様な演習を用意し、学生が主体的に取り組める環境を提供。

6. 課題提出後のフィードバック共有

- 提出された課題を匿名化して全員と共有し、学生同士が互いの考え方を学ぶようにしている。

7. 大人数授業への対応

- 学生数の増加に対応するため、課題のフィードバックや評価を自動化するスクリプトを活用し、効率的な運営を実現。

8. ハイブリッド形式の工夫

- 対面授業とオンライン授業を併用し、どちらの形式でも学習効果を得られるようにする取り組み。

大学/大学院における プロジェクトマネジメント教育の 実態調査



終わり

PMI日本支部教育国際化委員会

